

後藤ゼミの真価

渡辺和子

教養学部から専門課程に進むにあたり、色々やってみたいことはあったが結局その当時最も関心のあった聖書の勉強をしようと決めた。便覧を見ると新約聖書は西洋古典学科で、旧約聖書は宗教学科で学べることがわかった。どちらかといと「ヨブ記」や「イザヤ書」のある旧約聖書に心をひかれていたので、私は宗教学科に進学することにした。こうして後藤先生との運命的な出会いを迎えることになった。後藤先生に一番感謝したいことは、ヘブライ語を教えて下さったことである。ヘブライ語は美しい言語であり、旧約聖書を原語で読めることは大きな喜びであった。毎回の予習には相当の時間をかけ、聖書の内容をヘブライ語の響きからも理解できるように繰り返し朗読の練習をした。また東京にあるシナゴークをのぞいたり、ヘブライ語の美しい発音の持主に聖書の朗読

をテープに吹き込んでもらったこともあった。

後藤先生はイスラエルとドイツに留学され、アッシリア学をも修めておられたので、大学院の後藤ゼミでは、楔形文字文献の講読もあった。当時後藤先生が示して下さいましたアッシリア学の基本的文献のなかには、L.W.King, *First Steps in Assyrian*, London 1898 (東大中央図書館蔵書)もあり、私はその本に印刷された楔形文字に魅せられた。早速簡単な楔形文字をカードに書き移して、常時持ち歩いていた。授業で「ハムラビ法典」の楔形文字原文を読むことを私が先生にお願いしたこともあった。その教材となる本を中央図書館の書庫のなかに後藤先生について探しに行ったことを思い出す。

やがて私はドイツに留学してアッシリア学を専攻科目、セム語学と旧約聖書学を副専攻科目とし

て学ぶことになった。アッシリア学の方はどんな疑問にも即座に答えてくれる指導教官を得ておもしろいようにはかどった。ヘブライ語文法についてもドイツ語で説明出来るようになりたいと考えて、神学部のヘブライ語のコースを受講し、神学生に課せられているヘブライ語試験（ヘブライクム）を受けた。そこでもヘブライ語教師の見事な教授法を堪能することができた。私は極めて密度の濃い授業を受けながら感激を新たにする毎日を送り、「これこそ大学だ、私は今大学をやり直しているのだ」と考えていた。留学してからちょうど3年後に一度帰国したが、会う人ごとに充実した研究生活について熱っぽく語っていたように思う。学ぶ量もスピードも日本にいたときの何十倍もあると思われたのである。

ここで訂正しておきたいことがある。井上順孝氏はそのエッセイ「師の不在」（「東京大学宗教学年報V I 別冊、1988年、13ページ）のなかで、私が「ドイツに留学してしばらくたってから、東大の大学院時代がいかに無駄であったかを嘆いたことがあった」と書かれている。これは興奮の渦中にあったころの私の発言に基づいている。ところが7年半に及ぶ留学生活が終わりに近付くころには、当初の感慨もだいぶ修正され、問題意識や方法論などでは東大の宗教学科にいかにも多くを負っているかに気づかされるようになっていた。この実感はかなり強烈であったので、ドイツで仕上げた学位論文の前書きのなかに感謝の意とともにその旨を明記しておいた。しかしその箇所を開いて読んで下さる方は少ないので、ここでもう一度述

べさせていただく。私にとって留学が有益であったことは確かである。しかしそれは後藤先生の元で時間をかけて苦労しながら第一歩を踏み出していたからであると言える。改めて後藤先生に感謝したい。また宗教学科では、先生方も含めて先輩や後輩に当たる学生がひとつになったような、いわば学ぶ仲間から広い学問的刺激と人間的薫陶を受けることができた。「師の不在」とか「師の不要」（井上順孝、東京大学宗教学年報V I 別冊、1989、10-12頁）とか言っても、身を置いた場所で否応なく培われるものがあると思う。

私の留学中、ノルウェーに向かわれる途中の後藤先生が御家族とヨーロッパに来られ、夏休みの間デンマークやドイツと一緒に楽しく過ごしたことを思い出す。末娘の園（その）ちゃんは当時元気一杯の小学1年生であったが、今年もう大学へ行くという。園ちゃんは私が宗教学を始めた年に生まれたので、いつも私の‘宗教学’歴と園ちゃんの成長を重ね合わせて見てしまう。私が帰国してからは毎年先生のお宅に伺い、奥様のおいしい手料理をいただいた。1987年の冬、私がフィンランド学士院の出資でヘルシンキへ出かけることを先生に葉書でお知らせすると、先生は大変喜ばれて、先生の方からお電話を下された。今では奥様と電話でお話することが多くなったが、最近では私の娘の誕生を先生も喜んで下さったと伺った。

後藤ゼミに私が出席していたころから10余年を経たが、後藤先生を指導教官と仰いだ面々は現在もそれぞれに頑張り続けているので、後藤ゼミの真価が現れてくるのはこれからだと確信できる。